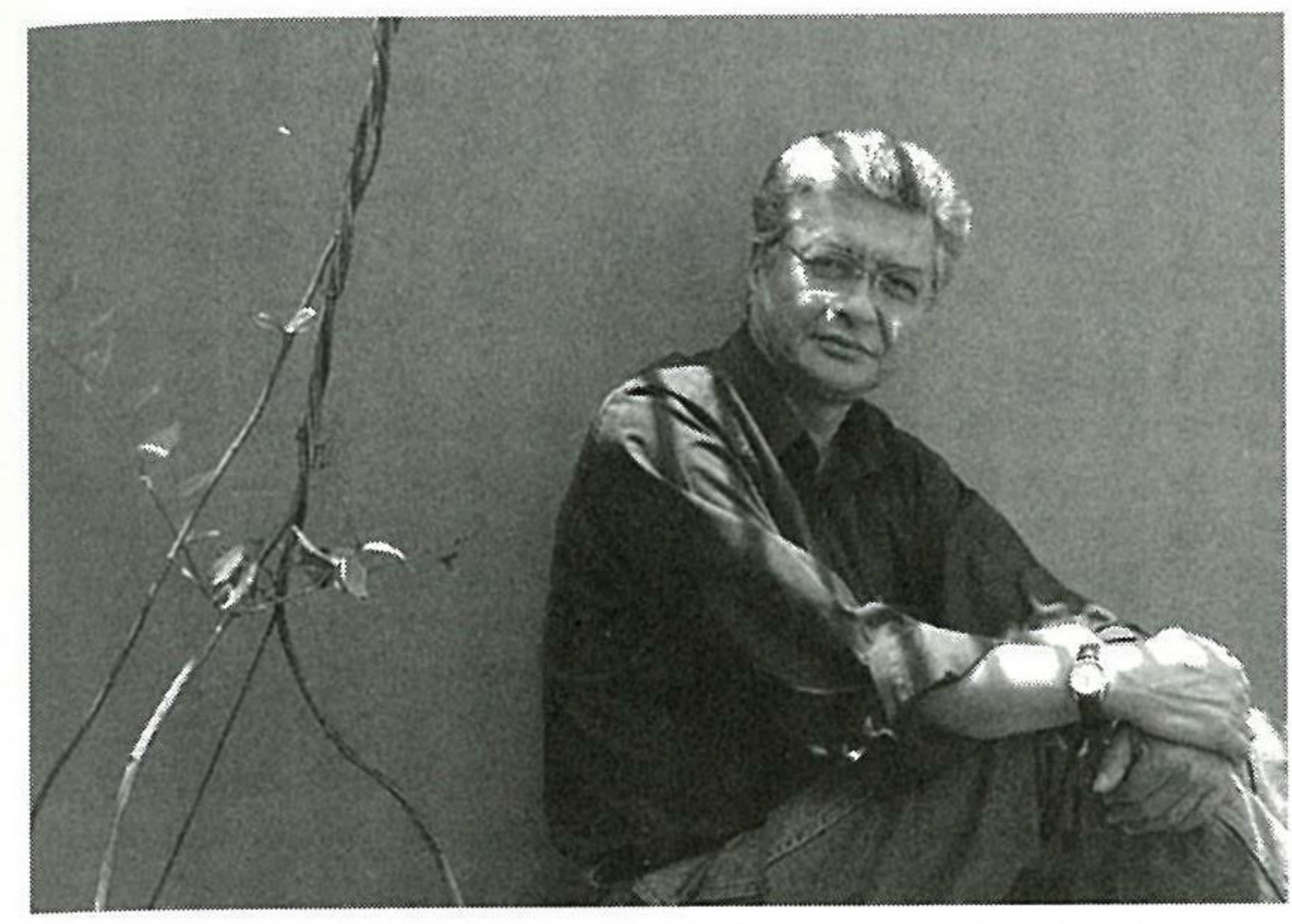


ペルーの日系詩人ホセ・ワタナベの詩

彼にお会いした一日を思い出しながら

星野由美



ホセ・ワタナベ

この夏、土曜美術社出版販売株式会社より、新・世界現代詩文庫として『ペルー日系詩人ホセ・ワタナベ詩集』を細野豊さんとの共編訳で刊行させて頂いた。そもそもホセ・ワタナベの詩選集を日本語で出版しようという試みは、二〇〇〇年に彼の詩選集『氷の番人』が出版された頃、詩人の細野豊さんからこの本を取り寄せたいと依頼を受けたことから始まった。ペルーには八万人以上の日系人が暮らすと言われている。その中でも、現代詩人として国際的評価を得ているのがホセ・ワタナベであった。

ホセ・ワタナベは、日系二世のペルー人である。一九四五年にペルー共和国北部のラ・リベルタ州ラレドの農場で、日本(岡山県)からの移住者である父親の渡辺春水

と、ペルー人女性のパウラ・バラス・ソトとの間に生まれた。一九七〇年、二十四歳の時に詩誌『クアデルノス』主催の若手詩人コンクールで最優秀賞を受賞し、初めてペルー国内で詩人としての評価を得た。二〇〇〇年に出版した詩選集『氷の番人』では、キューバの「カサ・デ・ラス・アメリカス賞」を受賞し、国際的に高い評価を獲得していた。

当時、私は在日ペルー大使館に勤務していた。一九九九年は「日本人ペルー移住百周年」の年だったこともあり、それ以降も両国間で様々な記念行事が盛んに行われていた頃だった。また、前職においてもペルーやブラジル日系人たちと職場を共にしていた経験があったため、私にとって日系人

である彼らのメンタリティは非常に興味深いものだった。陽気でストレートな感情表現というラテン気質の中に垣間見る律儀で繊細な一面、それは日本人である祖父もしくは父母から少なからず受け継いだ日本人の気質や道徳観によるものであろう。

また、詩人の細野豊さんも、長年にわたりラテンアメリカ諸国(ブラジル、アルゼンチン、パラグアイ、ボリビアなど)へ移住する人たちを援護する政府関係機関に勤務されたご経験から、ラテンアメリカの日系人との間には深く心に残る体験と彼らへの強い関心がありだった(詳しくは訳詩集『ペルー日系詩人ホセ・ワタナベ詩集』のあとがきをお読みいただきたい)。そんなわけで、ホセ・ワタナベの詩選集『氷の番人』を取り寄せた後、細野さんの指導の下で、私たちは一篇ずつ一緒に彼の詩を訳していくことになったのである。

ホセ・ワタナベの作品は故郷の地ラレドへの郷愁、家族の思い出、自然との対峙、動植物への眼差し、死の恐怖、苦痛・苦悩が謳われている。日本や日本文化を強調する詩はあまり多くないが、どの詩にも一貫して「静観する姿勢」が保たれている。主に批評家たちは、ホセ・ワタナベを語る時には必ず俳句との関連性を取り上げる。俳

句については、ホセ・ワタナベ自身もそれを認め、インタビューでこう語っている。「俳句を読んだり勉強したりしたのは、おそらく父への敬意のようなものからだ。僕が子どもの頃、父は俳句を読んでもくれた。父はまず日本語で読んで、それをすぐにスペイン語にしてくれた。――(中略)――確かに、俳句の影響については認める。だが、その形成においてではなく、俳句に書かれている姿勢によるものだ。生きている中で、どの瞬間に現実そのものが変わったものになるかを見る。それが詩だ。」

だからであろうか、ホセ・ワタナベの詩はスペイン語の詩であるにも拘らず、まるで日本の詩を読んでいるような感覚を覚えることがある。ペルーで生まれ育った日系人の彼の作品に垣間見える日本人特有の感性、儂い人生の、生命のもたらす一瞬の中に見る優美さ、そこに心を打たれる。詩の行間に、言葉の合間に溢れでる様々な複雑な感情に引き込まれるのだ。それは静かに、時に切なく読み手の想像力を駆り立てる。彼の詩を通じて、読者はペルーのオルモスの砂漠で渴いた空気を吸い、故郷の地ラレドの広場で時間の止まった時計台の前に佇み、緑色にきらめく砂糖黍畑を歩き、アンデスの山の麓の白い鉱脈を見るであろう。もう一つ、ホセ・ワタナベの詩に魅かれ

るのは、彼の詩の多くが「死」を意識した「生」を謳っていることだ。一九八六年、彼は肺癌の診断を受け、ドイツで放射線治療を受けた。その後、経過観察の期間に予後抑鬱症を患い記憶障害に苦しんだ。そして予後抑鬱症を脱して快方に向かう中、二〇〇〇年以降は意欲的に詩集を刊行していく。まるで何かに突き動かされるかのよう……。おそらく死を間近に意識していたからこそ、残された生をどう全うするかを常に自問自答していたのではないだろうか。彼の後期の詩作品は死を確実に意識した作品が多くなっていく。次にご紹介する詩では、時が止まったかのような静かな流れの中で、彼は自らの絶望をとりわけ穏やかな詩にして綴ると謳っている。

花

忍冬オシロイの花が明け方に萎んだ
そしてぼくは、花の香りのない中で、詩を
信じつづけた。

詩にこだわりつづけるのは難しい、花そのものが
ぼくらを困惑させるときはなおさらだ。
絶望の中で
ぼくはとりわけ穏やかな詩を書いた。

平静を願いつつほとんど理性を失って！

今、白夜のあとで
どんな詩もない中、ぼくは平静を保つ。
忍冬は、すでに言ったように、明け方に萎んだ。

ほかの花々は一日中あるだろう。
妻が居間に生けた百合、

葬列が落とす薔薇、
蜂の姿を見るやいなや命を奪おうと
荒々しく閉じる食虫植物の花。

この花たちから、いま一度ぼくは学ぼう、
ぼくがこれほど愛する詩は

目の儂く壊れやすい行為に過ぎないことを。

実際、ホセ・ワタナベの詩の代表作として評価が高い作品は、二〇〇〇年に出版した詩選集のタイトルにもなった「氷の番人」を始め、父親について語った「手」や「日本庭園」、俳句の精神が表れた「蠅螂」等が挙げられるだろう。一方、ここで紹介した「花」は、二〇〇六年に刊行した最後の詩集『霧の向こうの旗』に収録されている作品である。ホセ・ワタナベの詩の特徴でもある日本人性や俳句との関連性が顕著に表れたものではないのだが、二〇〇七年に癌で逝去される前の、死を間近にした彼の

心の叫びとも言える作品である。詩を書くことを愛してやまず、詩を書かずにはいられなかった彼の生き様を垣間見ることができらるだろう。

私はホセ・ワタナベに一度だけお会いすることができた。彼は物静かに優しく語り掛けるように話す方だった。ペルーのリマの街はとても賑やかだったのに、ご一緒させて頂いた時間は静かにゆっくり流れていたのを記憶している。ホセ・ワタナベの詩が痛烈な内容にも拘らず静かに穏やかに綴られるように、実際にご本人が語ってくれた内容もまた意外性に富んでいるにも拘らず、その語り口は実に淡々としたものだった。十二歳の時に父親が宝くじに当選したことで人生が一変し、農場で働いていた一家がラレドの村を去り、トルヒーヨの町に移り住んだ話は、まるでアメリカンドリームの映画のように思えた。また、日本に娘さんのひとりが入居していると、日本には何度か来られたのかと聞くと、日本へ訪れる機会があったが、強い必要性に駆られなかったと言われた。そして自分の作品にある日本や日本人像は、現代の日本にはもはや存在しないことも分かっていると述べられた。ホセ・ワタナベは父親を敬愛し理想化して

いたと言う。もしかしたら父親の語ってくれた日本もまた、彼の中で理想化されていたのかもしれない。だからこそ、敢えてそれを壊したくなかったのではないだろうか。結局、ホセ・ワタナベは来日することはなかった。しかし日本語で訳詩集を出す構想については快くご了承頂き、次の言葉を残してくれた。「日本語で出版される本をいつか手にするかもしれないことに熱い期待を抱いている。ずっと、それについて夢を見てきたように思う。それは父に対する敬意のようなものかもしれない」。

彼の生前に本の出版の実現が叶わなかった事を、細野さんも私もずっと心残りであった。この度、細野さんの長年の出版の構想が実を結び、ワタナベ氏の思いがようやく実現したのである。私にとって、これほど嬉しいことはない。

ホセ・ワタナベ (Jose Watanabe)

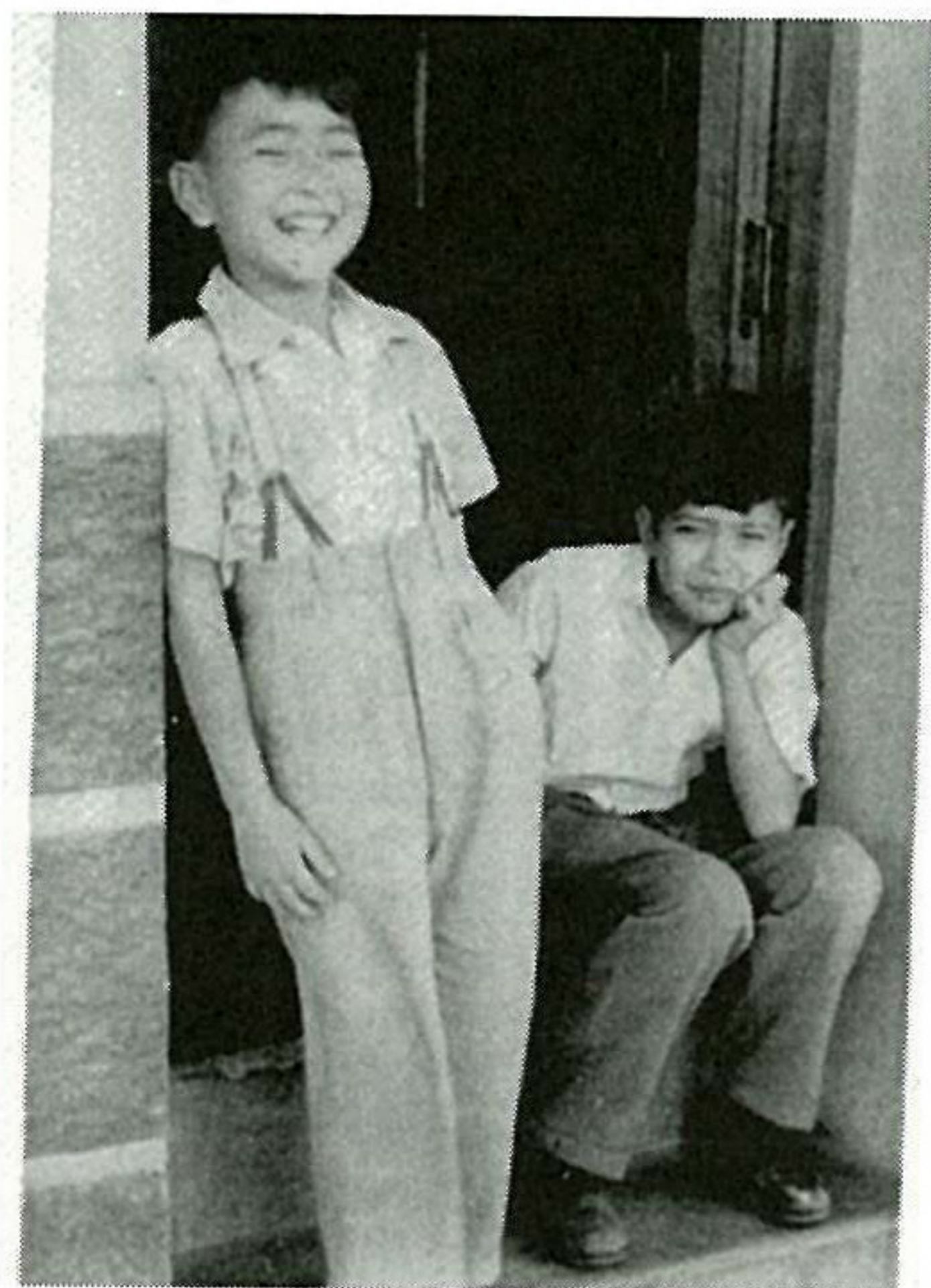
一九四五年三月十七日、ペルー北部のラ・リベルタ州ラレドで、日本(岡山県)からの移住者の父である渡辺春水(わたなべはるみ)と、ペルー人の母パウラ・バラス・ソトとの間に生まれる。一九七〇年二十四歳の時に、詩誌『クアデルノス』主催の若手詩人コンクールで最優秀賞を受賞し国内で詩人としての評価を得て、初めての詩集『家族のアルバム』(一九七二)を出版した。その後、『博物誌』(一九九四)、『身体的事々』(一九九九)の詩集を刊行し二〇〇〇年、詩選集『氷の番人』で、キューバの「カサ・デ・ラス・アメリカス賞」を受賞し国際的に高い評価を受けた。その後も『われらのうちに住み給へり』(二〇〇二)、『羽根のはえた石』(二〇〇五)、『霧の向こうの旗』(二〇〇六)の三詩集を刊行した。また、詩人としての活動に留まらず、バルガス・リョサの小説「都会と犬ども」の映画の脚本や、芝居の翻案など様々な戯曲も執筆した。亡くなる前の数年間は子ども向けの絵本の執筆に力を注ぎ、八冊の絵本(没後三冊を含めると計十一冊)を出版した。二〇〇七年四月二十五日逝去。



ミカエラ夫人と一緒に



父、渡辺春水(左側)



幼少期のホセ・ワタナベ (右側)